



60周年で閉室する岩見沢校「教育学第1研究室」の 歴史的背景(退職にあたって)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 門脇, 正俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9379

60周年で閉室する岩見沢校「教育学第1研究室」 の歴史的背景

門 脇 正 俊

岩見沢駅前を起点とする通りを2 kmほど進んだ突き当りが北海道教育大学岩見沢校であるが、その途中少し手前の広い敷地に位置する道立岩見沢農業高校の校舎に「祝 開校百年」の大きな垂れ幕がかかっている。1907（明治40）年に札幌農学校が帝国大学に昇格した際に、農業開拓の第一線での指導者養成の必要から、札幌農学校の一部が岩見沢に移り空知農業学校として再出発した。その農業学校の一室に1923年師範学校や農業学校の卒業生を入学資格とした1年制の北海道庁立実業補習学校教員養成所が設立された。実業補習学校は小学校卒業後の勤労青年たちに実学的教育を行った学校であるが、その教員養成所は1935年の青年学校への改組・拡充とともに2年制の青年学校教員養成所、さらに1944年に3年制の官立青年師範学校に昇格し、敗戦後の学制改革で1949年に新制国立大学が発足した際に北海道学芸大学を構成する1キャンパス（当初は札幌分校岩見沢分教場、1954年に岩見沢分校）となった。農業学校の間借り生活から現在地への独立校舎は1935年であるが、岩見沢校の前史は農業・農村振興と密接な関連を有していた。他方でまた、明治・大正・昭和前半期の日本経済を支えた石炭産業の拠点空知（支庁管内10市16町1村）の中心都市・岩見沢は石炭輸送のための鉄道の拠点であり、東北以北最大の鉄道操車場を有する鉄道都市でもあった。最盛期の50年前には札幌市を含む石狩支庁管内（82万人）より人口の多かった空知（87万人）ではあるが、石炭産業の崩壊や農村の過疎化によって、現在では札幌の肥大化と対照的に人口減が続き、40万人を割っている。

青年師範末期の1947年4月に着任され1968年3月まで22年間勤務された長谷川亀雄先生が郷里の富山県の短大に転出された後任として、私は1968年4月に本学助手として採用され、70年講師、72年助教授、82年に教授に昇任させていただき、今日まで39年の長期間、岩見沢キャンパスにお世話になった。長谷川先生と筆者が担当した教育学第1研究室は新制大学発足前からの最も古い教育学研究室であり、私の退職でもって丁度60年の歴史を閉じることになる。新田先生が担当されている教育学第2研究室の前任者は、1年後の1948年に赴任された奈良一三先生で、29年間勤務された1977年3月に定年退職され、新田先生が札幌校に転出される予定の2008年で岩見沢校教育学第2研究室60年の歴史を閉じることになる。佐藤宥先生が担当されている教育学第3研究室の前任者は1954年に着任され教育学第4研究室を担当されていた松田義哲先生で定年1年前の76年に母校の広島大学に転出された。1979年頃の新館落成に伴う研究室再配置の際に4研が3研に名称変更した。千賀先生の教育学第4研究室は、1953年に着任され教育学第三研究室を担当された福井先生、その転出後1964年に着任された笹島勇治郎先生が第4研究室へ



教育1研前の私
1968年7月

の名称変更を経て1995年定年退職まで31年間担当され、2年間の定員不補充（総合教育研究室を定年退職されていた渡邊守夫先生が非常勤で担当）後の1997に着任された金沢克美先生が本学大学院専任に配置換え後の20005.10～千賀愛先生が引き継いで今日に至っている。なお、岩見沢校前身の戦前戦中期間の教育学系担当教員（及び研究室の有無）については、別の機会に補足できればと思っている。

39年も同じ職場に勤務しながら、研究者としても教育者としても未熟なままの退職で関係各位にお詫びするが、生涯学習の時代、第二の人生でも学び続ける中で、少しでも不十分さを補えればと思っはいる。なお、卒論指導を中心とした演習を引き続き担当（非常勤講師）させていただきそうなので、40年目の来年度も学内を出入りさせていただくことになろう。後任補充がない場合、所属学生が残っている期間は研究室資料とともに研究室が存続し担当講師（多くは退職教授）も利用できるのが従来慣例であったが、大学再編成下の今回は、後任補充のない私の退職で教育学第1研究室は新課程用となり、私の指導学生たちが「研究室」のないまま卒論指導を受け残りの学生生活を送ることになるのは残念ではある。新旧の学生や教職員、岩見沢校のご発展を祈念いたします。